（様式５）　　平成31年度（2019年度）　　教職大学院派遣研修　研究報告書

派遣者番号	31K06	氏　名	栃木　昌晃
研究主題 ―副主題―	生徒の深い学びにつながる「話し合うこと」の指導 －「能動的な聞き手」の育成を目指して－		
派遣先	帝京大学　教職大学院	担当教官	細戸　一佳　　小山　惠美子
所属	世田谷区立太子堂中学校	所属長	小林　智明

キーワード：話合い　思考の可視化　協調学習

１　研究の背景（目的）・主題設定の理由等

東京都教育委員会による児童・生徒の学力向上を図るための調査報告書（平成29・30年度）によれば、「中学校の国語に関する課題として、話された内容について正確に聞き取ることはできても、聞き取ったことを活用して自分の意見を形成したり、必要に応じて質問をしたりすることに課題が見られる」ということが指摘されている。

また、平成 29 年告示の学習指導要領で示された「主体的・対話的で深い学び」を視点とした授業改善を実現するためにも、対話的に学ぶことが形式化、目的化してしまわないよう、授業者が明確なねらいをもつことと、それぞれに深い学びを得られる効果的な対話活動ができる生徒を育成することが必要である。

このような背景から、中学校国語科の「話すこと・聞くこと」の指導において、捉えたことを活用できる聞き手の育成、生徒一人一人が深い学びを得られるような話合い活動の設定という二つの課題を、「能動的な聞き手」を育成することを通して、その解決を図ろうとするものである。

２　研究の内容・研究の方法

この研究目的にアプローチするために、以下の四点の課題に取り組んだ。

① 話合いにおける深い学びの実際を明らかにする。

② 「話合いに関する実践」、「思考の可視化を目指した実践」、「思考ツールを利用した実践」についての先行研究を整理し、その成果と課題を明らかにする。

③ 生徒がメモを使う意識について、その現状を分析し、考えの形成過程を示すことができる「聞き取りメモ」の開発を行う。

④ 「協調学習」の視点を取り入れた、考えが広がったり深まったりする話合いができるようになる単元を開発、実践し、その効果の検証を行う。

平成 29 年告示の中学校学習指導要領解説総則編によれば、「深い学び」について「習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた『見方・考え方』を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう」学びと示されている。

各教科等において、音声言語を中心とした多様な言語活動が取り入れられていることから、それらをより効果的な活動にできるようにするために、国語科として何ができるのかを考えることは重要である。本研究においては、具体的な言語活動を話合いの場面に限定して、生徒がより「深い学び」が得られるよう、どのような実践が有効なのか探っていきたい。

３　研究の結果

話合いが単なる知識の相互伝達ではなく、「深い学び」につながるものにするためには、話し手、聞き手が互いに自分なりの解を追究し続けるという、協調学習における「建設的相互作用」が働いていることが必要である。そこで、坂本（2018）に示された「省察改善できる自覚をもち、批判的に、返答をはらむ理解を通して、言葉を補足し応用し、自己を客観視するモニタリングができる聞き手、さらに反応を表現する聞き手」のことを「能動的な聞き手」と定義し、その育成を目指すことが、話合いの中で「建設的相互作用」を生み出すために有効な手段なのではないかと考え、その補助となるツール及び授業単元の開発を行った。

また、人の話を聞く際に、単に内容を要約してメモを取るだけでなく、「自分は納得できるか」、「自分の考えに活かせそうか」という視点で、メモをとる位置まで考えさせる「聞き取りメモ」を開発した。このメモを通して、お互いの考えを結び付けながら主体的に聞くことができたり、メモの様子や振り返りの様子から、考えの形成が思うように進んでいない可能性

がある生徒を周囲（教師や班員）が感じ取ったりすることもできる。また、このメモを使っての振り返りを共有することを通して、聞き方に関する学びの自己調整が図れるのではないかと考えた。

実際に話合いの中で生徒が取ったメモを見ると、生徒は聞き取った内容の記述に加えて、矢印や濃さの異なる丸印などを用いて、自分の考えが話し合う前と途中、最後にどのように変化したのかを意識したメモの取り方ができていることが分かった。

4　研究の考察

話合いの中で「建設的相互作用」を生み出すために、以下のような授業単元で行った。

第１時 ①メモについて
　　②聞き取りメモの使い方
第２時 ①二項対立の話合い
　　②振り返り
第３時 ①企画案の話合い
　　②資料を用いる話合い
　　③二つを比較した振り返り
第４時 ①抽象度が高いテーマの話合い
　　②単元全体での学びのまとめ

なお、生徒がより主体的な態度で話合いに参加できるように、指導の段階ごとに複数のテーマを示し、それぞれにおいて生徒自身が話し合いたいテーマを選ぶことができるようにした。

この単元の実践を通して、次のような点を成果として挙げることができた。

○ これまでの話合い指導において課題と言われてきていることの一つが、協調学習の視点で言うところの建設的相互作用の不全と説明することができたとともに、能動的な聞き手の育成を通してその解消を目指すことの有効性が確認された。
○　相手の話を聞く際に、「自分の考えを意識することがなくなってしまっている」という聞くことにおける課題について、生徒自身が自覚することができた。
○　実際に話し合うことと、その振り返りを通して、生徒自身に「自分の聞き方が変わったこと」を自覚させることができた。
○　これまでなかなか話合いの中で発言する機会のなかった、学力に課題がある生徒や自分の考えに自信がない生徒にも発言を促す場面が多く見られるようになった。それは単なる配慮によるものではなく、「どんな意見も、自分の考えの形成につなげることができる可能性がある」という経験によるものだと考えられる。

5　今後の展望

本研究の成果を国語の授業における話合いに限らず、総合的な学習の時間や特別活動などにおいても、考えを形成する目的の話合い場面に汎用していくことを考えたときに、カリキュラム・マネジメントの視点から、３年間を通して、また他教科も含めて、系統的な学びとして「能動的に聞くこと」を身に付けさせていくことが必要である。

また、今回は４時間の単元設定であったために、聞き取りメモを使いこなすというツールの習得と、実際の話合いを短い時間で進めていく必要があった。そのため、話合いの段階を、「二項対立」、「企画案の形成」、「資料活用」、「抽象度の高いテーマ」と定めたが、それぞれの話合いについて、十分な時間で取り組むことができず、生徒の振り返りからも「話合いの中で今までと違う視点から意見を出すことができたが、最終的に自分の意見として考えをまとめることが難しかった」といった感想が見られた。

単元を通して「考えの形成過程を振り返る」ことを意識付けることで、生徒自身が「自分の聞き方が変わったこと」や「建設的相互作用の効果」を実感することができた一方で、より効率的なメモの取り方や、多様な意見から考えを収束させていく話合いの進め方など、時間をかけて習得することが必要な課題もある。主体的・対話的で深い学びの授業を実現するためにも、より効果的なツールの開発、他教科等との連携も踏まえた単元の開発を、今後も継続的に進めていきたい。